

小学校「外国語活動・外国語」の英語を点検する

石田 秀雄

1. はじめに

第二言語習得研究においては、学習者が産み出す誤りは避けることのできない発達過程上の現象であると考えられている。小学校の「外国語活動」が第3学年に引き下げられ、第5学年からは「外国語」が教科として導入されることが決まったが、今後も児童は誤りを繰り返しながら英語を学習していくであろう。他方、授業で使用する教材、あるいは教員がしばしば参照する指導書や教え方に関する解説書は、影響力の大きさから正確かつ適切な内容でなければならない。中学校や高等学校の教科書や指導書の場合、誤りや不適切な記述があれば、英語を専門とする教員によって指摘され、出版社にフィードバックされる可能性がある。しかし、「外国語活動・外国語」の教材や指導書の場合、小学校教員が必ずしも英語を専門としているわけではないことから、ほとんど気付かれずにそのまま放置されてしまいかねない。

試みに文部科学省が発行している「外国語活動・外国語」の教材である *Let's Try! 1 & 2* と *We Can! 1 & 2* の指導書や市販の解説書を調べてみたところ、文法上の誤り、不適切な表現、一貫性のない例文、不正確な説明が多数見つかった。それどころか、文科省が示している「学習指導要領解説」にさえ様々な問題点があることがわかった。そこで本稿では、「外国語活動・外国語」の「学習指導要領解説」、文科省が発行している上記の教材と指導書、さらに教え方に関する市販の解説書を点検することで、問題点を指摘するとともに修正案を提示していく¹⁾。なお、本稿の目的はこうした問題点が早急に是正されることを促し、教材や指導書・解説書の質を高めることにあり、特定の個人やグループに対する批判を意図したものではない。以下で検討する誤りや不適切な例、あるいは説明不足な点があるからと言って、教員にとっての有用性が完全に損なわれているわけではないことを予め申し上げておく。

2. 音声表記に関する問題点

現在の英語教育では、中学2年生用の教科書から発音記号が登場する。しかし、その指導は任意であり、また音声学を正式に学んだ経験がなければ、発音記号に関する正確な知識を持つことなく小学校教員として採用されてしまう。結果として、例えば中高の教科書

や「外国語活動・外国語」の指導書・解説書では、[ei]のように音声学上の区別を表す[]が用いられている一方、「学習指導要領解説」や『ジーニアス英和辞典』を初めとする多くの辞書では、/ei/のように音韻論上の区別を表す//が使われていることを知らぬまま教壇に立つことになる²⁾。

さて、指導書や解説書における具体的な音声表記であるが、異音の表記にも使用される[]ではなく音素の区別を示す//を用いるべきであることを除けば、不適切な個所が数多くあるわけではない。しかし、下に掲げた発音記号はすべて修正が必要である。

- (1) a. dragon [dræg(ə)n] ——吉田 (2017a : 72)
- b. dragon [dræg(ə)n] ——吉田 (2017b : 81)
- (2) a. guitar [gittá:] ——吉田 (2017a : 72)
- b. guitar [gítá:r] ——吉田 (2017b : 81)
- (3) post [pòust] ——吉田 (2017b : 81)
- (4) glove [gʌv] ——吉田 (2017b : 81)

(1)と(2)の標準的な発音の表記は、それぞれ /dræg(ə)n/、/gítá:/（または /gítá:r/）である。(3)の場合、1音節の語はアクセント記号を略すのが慣例（なお、grave accentは第2アクセントに用いられる）であるから、/poust/が適切である。また、(4)では、子音 /l/ではなく母音 /ʌ/の上に強勢が置かれるが、やはり1音節であるためアクセント記号は不要である。

さらに、文字と発音の関係について、次のような記述がある。

- (5) ABCを[a][b][k]と読む^{おん}音読み ——大城 (2017 : 106)

音読みはアルファベットの名称読みに対比されるもののようであるが、英語のAは単独の短母音として[a]と読まれることはない。文部科学省(2018a : 20, 87)でも、「語の中では /æ/」と発音されることを、bag等を例に挙げて言及している³⁾。

3. 文法に関する問題点

小学校の「外国語活動・外国語」では、英語に慣れ親しむことが目標の一部となっている。児童が触れることになる英語は、教材の英語だけでなく、小学校教員が話す英語も含まれる。当然、そうした英語は文法的に正しいものであることが望まれるが、母語話者であってもつねに正しいとされる英語を話しているわけではなく、ましてや非母語話者である小学校教員の英語に誤りが含まれることは避けられない。しかし、教員が使用する教材や参照する指導書・解説書は、可能なかぎり文法上の誤りや不正確な説明がないように、細心の注意が払われる必要がある。

3.1 名詞・冠詞

「外国語活動・外国語」の授業では、名詞表現を中心に学習が進んでいく。そのため、

教材や指導書・解説書には、名詞と冠詞に関わる誤りが最もよく現れる。

3.1.1 可算・不可算の区別

ほとんどの名詞は可算・不可算の両方の形で使用される。どちらで表現すべきかは、話者がどのように対象を捉えているかによって決まってくるが、言語慣習によって好ましいとされる形が存在する場合もある。まずは、可算扱いでなければならないにもかかわらず、冠詞が落ちているケースから見ていこう。

- (6) a. Are you cheetah? ——菅 (2018b : 60)
b. We spent very happy time, but we had a big mistake! ——兼重・佐々木 (2018 : 109)
c. I asked him “Hey, Onizuka-kun, do you like Gundam?” and he answered “Yes!” with smile!
——兼重・佐々木 (2018 : 113)

(6 a) の cheetah は a cheetah、(6 b) の very happy time は a very happy time、(6 c) の with smile は with a smile がそれぞれ正しい。

次の(7)の場合、NHK と news は形容詞的な修飾語として機能しているにすぎず、中心となる名詞 program は可算の形で言語化する必要がある。

- (7) So I often watch NHK news program. ——兼重・佐々木 (2018 : 123)

もし NHK のニュース番組全般を意味しているのであれば、NHK news programs と複数形に訂正し、ある決まった1つのニュース番組を意味するのであれば、NHK's news program とするのがよいであろう。

反対に不可算で用いた方がよい例を見ておこう。まず、chocolate であるが、チョコレート詰め合わせで様々な味のものが入っているような場合には、可算で用いられる可能性があるが、一般論としてチョコレートが好きであることを意味する場合は、不可算扱いである。したがって、後者の意味であれば、(8 a)は適切ではなく、(8 b)のように不可算で表現することになる。

- (8) a. I like chocolates. ——兼重・佐々木 (2018 : 41)
b. I like chocolate and bananas. ——文部科学省 (2018d : 8)

下の(9 a)の clay は、例えば There is a clay that allows us to make thin pots. のように種類を強調するのでなければ、不可算で用いるのが通例であり、there is (some) clay がよい。また、(9 b)の a glue は、some glue と不可算で表現するか、もしくは a glue stick とすべきである。

- (9) a. Hint No.3, there is a clay. ——兼重・佐々木 (2018 : 141)
b. I have twelve pens, four pencils, a ruler, a glue and an eraser.
——兼重・佐々木 (2018 : 29)

続いて、名詞が可算と不可算の両方の形で用いられている事例を取り上げる。(10)の orange は、「オレンジ」という果物を意味している場合は可算扱い、「オレンジ色」を表し

ている場合は不可算扱いになる。

- (10) a. I want an orange, please. ——兼重・佐々木（2018：135）
b. I like orange. ——文部科学省（2018d：20）

(11)の steak は、「肉」としての認識であれば不可算の形で、個別性を強調する場合は可算の形で表現されると考えられる。

- (11) a. I'd like beefsteak. ——文部科学省（2018d：81）
b. I'd like milk, a beefsteak, French fries, salad, yogurt and bread.
——文部科学省（2018d：80）
c. I like hamburger steaks. ——文部科学省（2018d：8）

次の(12)の dessert については、Campbell-Larsen 氏によれば、「デザート」が注文されることが十分予期される文脈では不可算扱いに、注文されるかどうか不確かな場合には可算扱いになるかもしれないが、実質的な意味の差はないのではないかという。

- (12) a. I'd like fruit for dessert. ——文部科学省（2018d：79）
b. You can order a main dish, a side dish and a dessert. ——文部科学省（2018d：79）

さらに、(13a)の冠詞なしの *kendama* は不可算扱いであり、「剣玉で遊ぶこと」あるいは「(遊びとしての) 剣玉」を意味しているのに対して、(13b)の不定冠詞が付けられた *kendama* は可算扱いになっており、「剣玉」という物理的に存在する玩具を意味している。これは baseball が「野球」というスポーツを表し、a baseball が「野球のボール」を意味するのと同じ関係にある。

- (13) a. I like kendama very much. ——文部科学省（2018d：9）
b. Satoshi, do you have a *kendama*? ——文部科学省（2018d：11）

日本語では可算性を意識する必要がないため、日本人英語学習者にとって、(10)から(13)に見られる意味やニュアンスの違いを感じ取ることは困難である。したがって、1つの教材や指導書の中で可算・不可算の両方の形を使用せざるをえないときには、差異に関して何らかの解説を付けることが望まれる。

3.1.2 単数・複数の区別

可算・不可算の区別の場合とは異なり、日本語を母語とする英語学習者であっても、単数と複数という概念は持っている。しかし、日本語はそうした区別を積極的に表現する言語ではないため、単数か複数かをつねに意識しながら英語を使うことは学習者にとって難しい。とは言うものの、(14)のような明らかに誤りだと判断される例は、直ちに修正されなければならない。

- (14) a. Many colorful fruit! Pineapples, dragon fruits, bananas. ——文部科学省（2018c：28）
b. Let's take a look at a day of a junior high school students. ——文部科学省（2018e：86）
c. We can eat delicious soba noodle. ——大城（2017：98）

d. I clap my hand when it comes to E. ——吉田 (2017a : 123)

(14a)はManyとともに用いられているのであるからfruitsが正しく、(14b)は不定冠詞aが付けられているにもかかわらず、studentsと複数形になっている点がおかしい。また、(14c)はnoodlesが正しいが、この誤りはカップラーメンの商品名の影響があるのかもしれない。さらに、(14d)の場合、「手をたたく」には両手が必要であるから複数形にすべきである。

次に「かき氷」を意味している(15)であるが、thisとshavesで数が一致していない。対象をどのように捉えるかにもよるが、these colorful ice shavesのように複数の側に寄せるか、もしくは文部科学省(2018e : 46)のI ate shaved ice.という例を利用して、this colorful shaved iceに訂正すべきである。

(15) You can see this colorful ice shaves. ——兼重・佐々木 (2018 : 63)

下の(16)は英文自体に誤りがあるわけではない。しかし、同書のイラストを見ると、複数の「足跡」が確認できる。

(16) It's a rabbit's footprint. ——文部科学省 (2018b : 35)

NHKの『スーパーえいごリアン』には、I think these footprints are a rabbit's footprints. という表現が出てくる。(16)のケースも、These are a rabbit's footprints. とした方がよいであろう。

(17)のやり取りでは、数の面で論理的に矛盾する点が見られる。まず、担任は「オレンジを1つ欲しい」と言っているが、ALTに「いくつ」と尋ねられると、「2つください」と答えており、突然、単数から複数へと数が増えている。

(17) ALT : What do you want?

担任 : I want an orange, please.

ALT : OK. How many oranges?

担任 : Two, please.

ALT : Two? OK. Is that all? (注文は各5つ、4種類まで) Here you are.

担任 : Wonderful! Thank you.

ALT : You're welcome. ——兼重・佐々木 (2018 : 135)

Campbell-Larsen氏によれば、「(果物の) オレンジ」というカテゴリーに強い意識が向いているときには、母語話者の英語としてan orangeはありうる言い方だという。しかし、こうした数の矛盾を避けるためには、I want some oranges.のような複数であることは意味しているが、具体的な数をぼかした表現を使った方が無難であり、解説を加える必要もなくなる。

続いて、単数か複数かで揺れている例を挙げておこう。まずは、sportからである。

(18) a. Are you good at sports? ——文部科学省 (2018e : 57)

b. What sport are you good at? ——文部科学省 (2018e : 57)

- (19) a. A: What sports do you like?

B: I like baseball. ——文部科学省（2018a：107）

- b. A: What sport do you like?

B: I like soccer. ——文部科学省（2018a：120）

一般に sport は、イギリス英語では集合的な意味合いが前面に出され不可算扱いになるのに対して、アメリカ英語では個別性に重点が置かれ可算扱いとなる。後者の場合、話し手が聞き手に対して答えをいくつか求めているのかによって、単数形と複数形が使い分けられる。因みに、複数の種類のスポーツが好きであったり、得意であったりする可能性は十分に想定されるため、複数形で尋ねるのはごく普通のことである。

(20)の subject は、「科目」の意味では不可算の用法はないものの、単数と複数の使い分けという点では sport に似ている。

- (20) a. What subjects do you like? ——菅（2018c：24）

- b. A: What subject do you like?

B: I like math and English. ——菅（2017：156）

興味深いことに、先程の(19a)の例で A は sports と複数形を用いて尋ねているが、B はその答えとして baseball しか挙げていないのに対して、(20b)では A が subject と単数形で尋ねているにもかかわらず、B は math と English の2つを挙げている。これは、尋ねる側だけでなく答える側も自由に数を選択してよいことを示すものである。

可算か不可算か、さらに単数か複数かで揺れが見られる別の例としては、小学校の授業でよく使われる fruit という名詞がある。これに関しては、先に用法を整理しておこう。

- (21) a. Children should eat fruit and vegetables. 不可算（集合的）

- b. Eat a piece of fruit. 不可算（部分）

- c. Avocados are a fruit. 可算（単数）

- d. Choose from a selection of fruits. 可算（複数）

上記の用法を参考にしながら、次の例を見てみよう。

- (22) a. I like fruits. ——兼重・佐々木（2018：89）

- b. What fruit do you like? ——文部科学省（2018b：20）

- c. 店員: What fruits do you want?

客: I want apples and bananas. ——文部科学省（2018a：116）

まず、果物全般を表したいときには、(21a)がそうであるように集合的に捉えるのが通例であり、複数形を用いた(22a)ではなく、I like fruit. のように不可算で表現する。ところが、好きな果物や欲しい果物の種類を尋ねる疑問文においては、fruit を可算扱いにして、単数形で用いることも複数形で用いることもできる。(22b)においては、答えとして1種類の果物が想定されているのに対して、(22c)では複数の種類が想定されていると考えられる。(21)に示した用法に関する知識は、初学者である児童にとって差し当たり必要なものでは

ないが、fruit は頻繁に登場する名詞なので、教える側の立場としては正確に理解しておきたい事項ではある。

続いて、曜日である。曜日は大文字で始まることから固有名詞的な存在として位置付けられているが、可算扱いの普通名詞になることもある。

- (23) a. We study / have English on Monday and Wednesday. ——文部科学省 (2018a : 112)
- b. Do you have P.E. on Mondays? ——文部科学省 (2018a : 86)
- (24) a. I like Friday. ——文部科学省 (2018d : 29)
- b. I like Mondays. ——文部科学省 (2018a : 40)

(23)に見られる違いについて、『ウィズダム英和辞典』は「on Sunday は過去時制の文では「この前の日曜日」、現在・未来時制の文では「今度の日曜日」を表す。さらに「日曜日はいつも；毎週日曜日に」の意味もあり、on Sundays とするとさらに習慣性が強まる」と説明している。(24)は曜日に前置詞 on を伴っていないが、複数形の曜日の方が何かよいことが繰り返し起こるという気持ちが表されていると考えられる⁴⁾。

アルファベットの文字を固有名詞的に用いれば、(25a)のように冠詞は付かないが、数が問題となれば可算扱いの普通名詞として用いられる。(25b)については、X の発音は母音で始まるので不定冠詞 an が、また(25c)に関しては、e が3つあるために複数であることを示す -s が付けられていることにも注意したい⁵⁾。

- (25) a. I have “O” and “M” in my name. ——文部科学省 (2018b : 27)
- b. I have a “T” and an “X.” ——文部科学省 (2018c : 26)
- c. I have a “T” and three “e” s. ——文部科学省 (2018c : 26)

3.1.3 定・不定の区別

定性という概念は、小学校の「外国語活動・外国語」で積極的に教える必要はない。児童が名詞の前に /ð(ə)/ という音が存在することに気付くだけで十分である。しかし、小学校教員としては、英語が専門ではなくても、定性に関する知識をある程度は身に付けておきたい。定性については、「ある名詞が指している対象を、文脈や場面から聞き手も知っていると話者が考えている場合には、定冠詞が用いられる」と理解しておけば、指導する際に役立つであろう。まずは、この定義から逸脱しているために、不自然に聞こえるケースから見ていこう。

- (26) a. Welcome to Nagaoka in Niigata. We have the fireworks festival. ——菅 (2018b : 32)
- b. We have a snow festival in a city. ——文部科学省 (2018a : 104)
- c. Fireworks festival is fun. ——吉田 (2017b : 34)

(26a)の2つ目の文は、the fireworks festival と定冠詞が使われていることから、「聞き手も知っているはずの花火大会がある」という意味を表してしまっており、文脈次第ではあるものの、あまり自然な流れになっていない。初めて「花火大会」について紹介するのであ

れば、We have a (famous) fireworks festival. とし、その後に説明の文が続く形にすれば問題ない。反対に(26b)の例では、主語が We であるにもかかわらず、文末に in a city という表現が用いられている。不定冠詞の存在は、We と a city の間には関係性・結束性がないことを示すものであり、全体として奇妙な文になってしまっている。定性は人称代名詞によっても表現されるので、ここは in our city とすべきであろう。(26c)の場合、一般論を表しているのであれば、複数形にして Fireworks festivals are fun. とし、「聞き手も知っているはずの花火大会」という意味であれば、定冠詞を付けて The fireworks festival is fun. と修正する必要がある。festival は可算扱いであり、固有名詞的に使用される事例を除き、裸の単数形では用いられない。

ところが、少々困ったことに、名詞 festival の前に日本語の祭名を付けるケースでは、定冠詞 the を用いるのか、さらに言えば大文字で書き始めるのか、イタリック体で表記するのか、引用符を付けるのかといった点で、かなりの揺れが見られる。

- (27) a. I like *Yamakasa* festival. ——文部科学省（2018a：37）
 b. The “Nebuta Festival” is a big summer festival in Aomori in Japan.
 ——文部科学省（2018d：17）
 c. the Tanabata Festival ——文部科学省（2018e：16）
 d. I like Aoi festival. ——菅（2017：73）

最も妥当な表記方法は(27c)であろう。Oxford Street と同様に定冠詞を落とし完全に固有名詞化させても差し支えないが、その場合は Festival と大文字で始めるのが適切である。祭の名称を敢えてイタリック体で表記したり、引用符を付けたりする必要はない。

「自分の教室」をどのように言い表すかについては、いくつかの可能性がある。文部科学省(2018c)では3種類の表現が登場する。

- (28) a. Turn left at the classroom. ——文部科学省（2018c：33）
 b. This is my classroom. ——文部科学省（2018c：32）
 c. Our classroom is my favorite place. ——文部科学省（2018c：34）

定冠詞 the は、名詞の指示対象が文脈や場面において唯一的存在であること、つまり他に指しうるものがないことを表すものである。すでに言及した指示対象に再度言及する場合は別であるが、文脈の支えがない状態で、(28a)のように the classroom とすると、「この学校には教室が1つしかない」という意味を表しかねないので注意を要する⁶⁾。

逆に、他に指しうるものがないことを表すという点を利用しているのが、次の(29)である。定冠詞を用いることによって、「これが（わが校に1つしかない）体育館だ」ということが含意されている⁷⁾。

- (29) This is the gym. ——文部科学省（2018c：34）

続いて、「the + 名詞の複数形」であるが、この形式はひとかたまりとなっている対象を全体としてまとめて表現する時に用いられる。下の例では、両方とも the が付けられてい

るが、単数か複数かの違いがあり、意味も異なる。

(30) a. I went to the mountain. ——文部科学省 (2018e : 46)

b. I went to the mountains. ——文部科学省 (2018e : 46)

聞き手も知っているはずの「(1つの) 山」に行ったのであれば、(30a)はもちろん正しい。しかし、「(海ではなく) 山に行った」ということを表現したいのであれば、(30b)のように the mountains が慣習的に用いられる。

下の(31)の場合、様々な競技種目をひとまとめにしたものが「オリンピック」であるから、the Olympic Games に修正しなければならないが、略して the Olympics としてもよい。いずれにしても、「the + 名詞の複数形」である。(32)については、「大リーグ」が the American League と the National League の2つのリーグによって構成されているため、両者を一括して表現するときは、the Major Leagues となる。

(31) In 2020, in Tokyo, we have the Olympic Game. ——兼重・佐々木 (2018 : 43)

(32) I want to play in Major League in the future. ——菅 (2017 : 126)

しかし、次の(33)のように、「大リーグ野球」を意味する場合、Major League Baseball に the は不要である。baseball はあくまで baseball なのである。

(33) Then I want to watch the Major League Baseball! ——文部科学省 (2018d : 59)

上例では the を取る以外に、a Major League Baseball game や Major League Baseball games のように、「試合」を際立たせることもできる。

今度は、同格であると考えて、定冠詞 the を誤って付けてしまった事例である。

(34) Look at the pages 50 and 51. ——文部科学省 (2018e : 67)

類似の例で説明するならば、定冠詞を伴わない number one は「1番」や「最良」という意味であるのに対して、同格のために定冠詞を伴っている the number one は「数字の1」あるいは「1という数字」を意味する。だが、上掲の(34)は同格ではない。「課」や「講」を意味する lesson あるいは unit も、Lesson 1 や Units 2 and 3 のように定冠詞は不要である。ただし、数とともに用いられていない(35)の lesson は可算扱いであり、裸で使用すべきではない。

(35) Let's start English lesson. ——吉田 (2017a : 99)

上例は、our English lesson や today's English lesson のように修正しなければならない。

3.2 代名詞

人称代名詞が何を受けているのかは、文脈や場面から解釈することになるが、若干の判断を要するケースが見られる。下の例では、後続する文の主語 It は何を指しているのだろうか。

(36) a. In France people enjoy eating “escargot” or snails. They are cooked with butter and herbs. It's delicious and very popular. ——文部科学省 (2018d : 77)

- b. There are three kinds of animals that I like. Can you guess my favorite animals? It is white. ——兼重・佐々木（2018：79）

(36a) の They は複数形の snails であることは間違いないが、It は引用符で囲われた escargot という名の料理のようである。他方、(36b) の場合は、これから1種類ずつ動物を列挙していこうとして、It を用いているのであろうか。

次の(37a)の場合、they が Niagara Falls を指していることは明らかである。(37b)では、2番目の文に現れる It は the aurora を受けていると思われるが、最後の文に出てくる It は何を指しているのであろうか。the Rocky Mountains であろうか、それとも Niagara Falls であろうか。

- (37) a. Oh, I want to see Niagara Falls, too. I hear they are wonderful.

——文部科学省（2018d：59）

- b. You can see the aurora. It's beautiful. You can see the Rocky Mountains and you can see Niagara Falls. It's beautiful in winter. ——文部科学省（2018d：61）

形式上、the Rocky Mountains も Niagara Falls も複数扱いになっているので、いずれでもない。考えられるとすれば、文脈から思い浮かべられた眺め (the view) を It と表現したのではないかということである。こうした It の使い方は日常会話的には不自然でないかもしれないが、学校英語としては破格であり、何らかの解説がないと小学校教員の間で混乱を来す怖れがある。

人称代名詞以外では、不定代名詞に誤りが見られた。(38a) は a red one に、(38b) は black, brown, and red ones に直さなければならない。

- (38) a. How about red one? ——菅（2017：125）

- b. We have black, brown, and red one. ——菅（2017：153）

不定代名詞 one が形容詞を修飾語として伴う時には、冠詞を付けるか複数形にする必要がある。

3.3 前置詞・副詞

前置詞に関しては、基本的な部分で誤りがあったわけではないが、修正すべきものを挙げておく。

- (39) a. Well, we went camping to the river. ——文部科学省（2018e：50）

- b. In the first morning in Spain, we saw Sagrada Familia.

——兼重・佐々木（2018：109）

(39a) において、go + -ing という表現の後に来る場所は、通例 to によって導かれることはなく、この場合であれば by や along 等がよいだろう。(39b) は On the first morning が正しい。

前置詞の有無により、自動詞と他動詞が混在している例も見られる。「犬を散歩させる」

のであれば、(40a)のような前置詞 with を伴った自動詞ではなく、(40b)のように他動詞で用いるのが一般的である。他方、(41a)の ride on と(41b)の ride の違いは、話者が事態をどのように捉えているかに由来する。on が付けられている方は、「騎乗」のイメージがより強いと考えることができるが、通例、on なしで十分である。解説を付けないのであれば、どちらも前置詞を外して他動詞で統一した方がよいのではないだろうか。

- (40) a. I always walk with my dog. ——文部科学省 (2018a : 108)
- b. Yes, and I usually walk my dog. ——文部科学省 (2018d : 38)
- (41) a. You can ride on a camel. ——文部科学省 (2018d : 56)
- b. You can ride camels. ——文部科学省 (2018d : 58)

3.4 動詞

動詞との関連で言えば、三人称単数現在の形態素 -s は児童が触れる英語にもしばしば登場する。極めて単純な規則によっているが、日本人英語学習者には習得が難しい項目の1つである。(42)のような提示の仕方は、いわゆる「三単現の -s」が任意であることを含意してしまうので適切ではない。

- (42) He practice(s) baseball every day. ——吉田 (2017b : 39)

次に、個別の動詞に関わる問題を取り上げていく。まず(43)であるが、teach という動詞は科目等を教える際に用いられ、口頭で道を教える場合は tell が使用される。また、間接目的語に人（この場合は、文脈から her）が来るべきであり、station は大文字で始める必要がある。

- (43) I taught how to get to ○○ station. ——兼重・佐々木 (2018 : 145)

続いて、「起きる」に相当する動詞である。英語では、「目を覚ます」ことは wake up で表現し、「目を覚まし、ベッドから出る」ことまでであれば get up を使用する。下例はすでにベッドから出ている状況を表しているので、get up で表現する方が自然である。

- (44) Oh, you have breakfast at six. Wow, you wake up early! ——兼重・佐々木 (2018 : 151)

さらに、「読書が好きだ」という意味の英語は(45a)のように read (ing) だけで十分であり、(45b)のようにわざわざ books まで言う必要はない。「自動車を運転する」の drive や「酒を飲む」の drink と同様、目的語を明示しなくてもよい。(45c)の場合、例えば before bed 等を伴っていれば a book を目的語に取ることはできるが、一般論であれば目的語は不要である。

- (45) a. I like reading. ——文部科学省 (2018e : 36)
- b. I like reading books. ——文部科学省 (2018e : 40)
- c. I like reading a book. ——菅 (2018c : 50)

下掲の(46)は、丁寧な勧誘表現である would like を教える際に注意を要する点についての説明である。

- (46) “What do you like?” が “What would you like?” になると、丁寧な言い方になることを理解させる ——菅 (2018b : 85)

確かに、What do you like? は直説法であり、What would you like? は仮定法である。しかし、後者は意味的には What do you like? ではなく、What do you want? の丁寧な言い方である。なお、形式上、would に対応する直説法の助動詞は will であるが、通例、What will you like? は使用されないと考えて差し支えない。

3.5 表記法・句読法

英語の表記として好ましくない例が一部に見られるので指摘しておこう。(47a)は大文字と小文字の使い方に問題がある。正しくは the Tower of Pisa である。(47b)の場合、1と2は one および two と英語で綴られているのに対して、3だけが数字のままであり、表記が統一されていない。基本的には、10（または11）から数字を用い、それまでの自然数はスペルアウトする。

- (47) a. I want to see The tower of Pisa. ——菅 (2018b : 75)
b. I have two pencils, one eraser, one red pen and 3 rulers in this pencil case.
——兼重・佐々木 (2018 : 117)

次に、終止符、コンマ、疑問符の使い方である。まず、(48)は疑問文であるから、終止符ではなく疑問符でなければならない。

- (48) Do you have ～. ——吉田 (2017a : 120)

また、(49)のように、接続詞 but の後にコンマを入れることは絶対的な誤りではないものの、原則不要である。この現象は、日本語において「しかし」の後に読点を置く慣習があること、副詞 however が文頭にある場合、後にコンマを置かねばならないことの影響による不適切な例であると考えられる。

- (49) a. But, I don't like lizards. ——兼重・佐々木 (2018 : 39)
b. But, I can't play soccer. ——吉田 (2017b : 105)

下の(50a)では疑問符が付けられているが、下降調で発音した場合は「何だと」という言い返しの表現になりかねないので、(50b)の終止符の方がより適切である。

- (50) a. Excuse me? ——文部科学省 (2018a : 88)
b. Excuse me. ——文部科学省 (2018a : 117)

細かいところではあるが、略号と句読点の関係で気になる例を示そう。(51)に示した通り、OK と O.K. の2種類の表記が見られるが、後者の場合、直後に終止符等の記号が来たときにどう処理するかに関して揺れがある。(52)の P.E. の場合も、処理の方法が異なっている。

- (51) a. OK. Let's go. ——文部科学省 (2018d : 7)
b. Are you O.K? ——文部科学省 (2018a : 36)

c. O.K.? ——吉田 (2017b : 142)

(52) a. I have P. E., science, math and social studies. ——文部科学省 (2018d : 28)

b. I have Japanese, science, math, social studies and P.E. ——文部科学省 (2018d : 28)

句読法については、母語話者の間でも意見が分かれる。現実的な解決策としては、略号の終止符が疑問符またはコンマ等と重なる場合は、(51c)や(52a)のように両方とも書き、文全体の終止符と重なる場合は、(52b)のように1つで済ませるとよいであろう。

3.6 その他の問題点

ここまで問題点を分類しつつ、修正案を示してきたが、これら以外に改善を要する点をいくつか指摘しておこう。まず、(53a)では fun が形容詞の例として示されているが、純然たる名詞である。その証拠に、(53b)の fun は a lot of の修飾を受けている。

(53) a. It was fun. ——文部科学省 (2018a : 97)

b. It's a lot of fun. ——文部科学省 (2018d : 53)

次に、語順である。1人称と他者を and で繋げる場合、主語の位置であれば「2人称(+3人称) and I」と並べるのが基本である。したがって、(54a)の並べ方は好ましくなく、(54b)が適切である。

(54) a. I and my wife like sandwiches. ——兼重・佐々木 (2018 : 55)

b. My sister and I like it so much. ——文部科学省 (2018e : 21)

日本語における「アルファベット」は文字を意味することもあるかもしれないが、英語の alphabet は音声を表記する文字体系を意味するため、(55)の2例は修正が必要である。

(55) a. What alphabet do you have? ——菅 (2018b : 26)

b. What alphabets can you see? ——吉田 (2017a : 148)

英語では、1つひとつの文字は alphabet letter と呼ばれるが、短く letter としてもよい。文部科学省 (2018b : 24) には、Can you see any letters of the alphabet? という文が登場するが、これを利用して表現することもできる。

続いて、rain cats and dogs という慣用表現である。

(56) Oh, it rains cats and dogs. ——文部科学省 (2018c : 11)

空から「犬と猫が降ってくる」わけであるから、児童が喜びそうな表現であることは確かだが、古い表現であり生産性も低いので、It rains a lot / very heavily. といった応用の利く表現から学習すべきである。

最後に、英語として文法的に誤りであるわけではないものの、形式面が重視され過ぎているために、語用論的にやや適切でない例を指摘する。

(57) A: Do you have a ruler?

B: Yes, I do. I have a ruler. / No, I don't. I don't have a ruler.

——文部科学省 (2018a : 36-37)

もちろん、場面にもよるが、上記の文法ドリルのようなやり取りは、対話例としては不自然である。「外国語活動・外国語」では、文法偏重を避け、コミュニケーションを重視することを目指すのであれば、下の(58)のようなやり取りを提示すべきであろう⁸⁾。

(58) a. A: Do you have a red pencil?

B: Yes, I do. Here you are. ——菅（2017：72）

b. A: Hello. Do you have a pen?

B: Sorry, no, I don't. ——文部科学省（2018a：38）

答えがYesの場合、(58a)のように相手の意図を理解した上で、Here you are. といった発話を伴いながらペンを渡す行為を遂行できるところまで、また答えがNoの場合は、(58b)のように謝罪機能を有する表現を付け加えるところまで指導したい⁹⁾。

4. おわりに

以上、小学校「外国語活動・外国語」の「学習指導要領解説」、文科省が発行している教材と指導書、さらに教え方に関する市販の解説書の英文とその説明を点検してきた。とくに指摘はしなかったが、単なる誤植と推測される誤りもあれば、思い違いによって生じていると考えられる誤りも見られた。だが、紙幅の都合上、本稿では扱えなかったが、不適切な事例はまだ数多く存在する。誤りを完全に無くすことは極めて困難であるが、外部からの指摘を受けることによって修正が加えられ、よりよい教材や解説書へと改善されていくことが望まれる。小学校で「外国語活動・外国語」を担当する教員は、必ずしも英語を専門としていないため、英語表現が文法的であるのかどうか、説明に妥当性があるのかどうかを判断するのは容易ではない。教材や解説書は児童・教員に対して模範を提示すべきものであるが、それらを作成する側（とりわけ文科省や英語の専門家であるはずの编者）が細心の注意を払わなければ、誤りや不適切な説明は教員を通じて児童にまで拡散されていってしまう。本稿では自らの過去の反省を振り返りつつ、教材や解説書に現れた問題点を指摘してきたが、ここでの議論が「重箱の隅をつつく揚げ足取り」と見なされることなく、様々な改善へとつながっていくことを願うばかりである。

注

- 1) 英文の評価に当たっては、京都女子大学准教授の John Campbell-Larsen 氏から母語話者としての貴重な助言をいただいた。謝意を表すとともに、最終的な判断に関わる責任は筆者自身にあることを付け加えておく。
- 2) ついでながら、『ジーニアス英和辞典』や『ウィズダム英和辞典』は /ei/ のように二重母音の後の要素に /i/ という発音記号を用いることで、/i/ と /i:/ とでは音の質が異なることを明示している。どこまで精密に表記するかは議論の余地があるが、そのまま発音をすれば「音韻的に通じる」程度の表記は必要であり、/ei/ という表記の方が優れていると言えよう。
- 3) ただし、文部科学省（2018a：103）は、説明の中で g を /dʒi:/ と表記しているが、1 音節であるにもかかわらず、アクセント記号を付けている（左側のスラッシュの後で、誤って改行もしている）。この説明の直前で d を /di:/ とアクセント記号なしで表記しており、両者間に一貫性が見られない。
- 4) なお、「今年、クリスマス・イブは日曜日に当たる」に相当する英語は Christmas Eve falls on a Sunday this year. であり、曜日に不定冠詞が付けられる。
- 5) 菅（2018a：106）に It's a "M." と It's a "N." という文が出てくるが、M も N も発音は母音で始まるので、冠詞は an が正しい。
- 6) 文部科学省（2018c：32-33）にイラストが描かれている小学校には、classroom が 1 つしかない。だが、全国的に見ても、そのような小学校は極めて稀な存在であろう。
- 7) 文部科学省（2018c：33）は、「指導者は、デジタル教材に映し出された校内地図の教室を指しながら、This is a ~? と、児童に続きを言わせるようにして確認していくとよい」と説明している。学校施設の分類（classification）が問題となっているのであれば、不定冠詞を伴う可能性はあるが、一般に学校を案内するという行為は各施設の同定（identification）を行なうことが目的であるので、the gym, the music room 等のように定冠詞を付けて紹介する場合が多い。どのような状況でのコミュニケーションなのかにもよるが、上の説明が誤解を招きかねないものであることは認識しておいた方がよい。
- 8) ただし、(57) のような例が、文法学習において言語形式を確認する上で有用であることまでは否定しない。
- 9) さらに自然な会話を意図するのであれば、(58b)にある Hello. という挨拶は Excuse me. のような質問をするときに用いられる表現に変更した方がよいであろう。現在の「外国語活動」で、この Hello. が過剰に使用されている点が非常に気になる。

参考文献

- 井上永幸・赤野一郎（編）. 2019. 『ウィズダム英和辞典（第4版）』三省堂.
- 菅正隆（編著）. 2017. 『平成29年改訂小学校教育課程実践講座 外国語活動・外国語』ぎょうせい.
- 菅正隆（編著）. 2018a. 『小学校外国語活動“Let's Try! 1 & 2”の授業&評価プラン』明治図書出版.
- 菅正隆（編著）. 2018b. 『小学校外国語“We Can! 1”の授業&評価プラン』明治図書出版.
- 菅正隆（編著）. 2018c. 『小学校外国語“We Can! 2”の授業&評価プラン』明治図書出版.
- 兼重昇・佐々木淳一（編著）. 2018. 『小学校外国語活動“Let's Try! 指導案・評価完全ガイド』学陽書房.
- 南出康世（編）. 2014. 『ジーニアス英和辞典（第5版）』大修館書店.
- 文部科学省. 2018a. 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版.
- 文部科学省. 2018b. 『Let's Try! 1 指導編』
- 文部科学省. 2018c. 『Let's Try! 2 指導編』
- 文部科学省. 2018d. 『We Can! 1 指導編』
- 文部科学省. 2018e. 『We Can! 2 指導編』
- 日本放送協会. 「スーパーえいごリアン scene 03 雪の上に見つけた足跡は？」
http://www.nhk.or.jp/eigo/eigorian/?das_id=D0005140200_00000
- 大城賢（編著）. 2017. 『平成29年版小学校学習指導要領ポイント総整理 外国語』東洋館出版社.
- 吉田研作（編著）. 2017a. 『平成29年版小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書.
- 吉田研作（編著）. 2017b. 『平成29年版小学校新学習指導要領の展開 外国語編』明治図書.